

『120分 de 法華経!』 vol.9 Dec.2024

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 信解品第四』 (迹門・正宗分)

○『又如來の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も隨喜せん

者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』(法師品 二〇二頁 終五行)

○『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』(方便品 八十二頁 四行)

○「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』(法師品 二〇九頁三行))

○『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得

たりと知れ』(法師品 二〇九頁 三行)

○『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、
りっぱな精進といえる』(『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



<信解品のあらすじ>

【四大声聞の懺悔】—

世尊が『警諭品』で説かれた『三車火宅の警え』を伺い、四大声聞(摩訶迦葉・まかかしょう、慧命須菩提・えみょうしゆだい、摩訶迦旃延・まかかせんねん、摩訶目犍連・まかもけんれん)は、①世尊が『方便品』で示された『諸法実相』の意味。そして、②さまざまな『方便』を用いて『すべての人に自身の仏性を自覚させ』、『仏の境地を悟らせる』という仏の大慈悲を、心の底から信解することができました。

【百十六頁一行】四大声聞は眞実を知ることができ、そして舍利弗に成仏の保証を授ける授記を目(ま)の当たりにして、心から歡喜踊躍(かんぎ ゆやく)したのでした。

四大声聞は感激で全身を震わせて立ち上がり、衣服を整え、畏敬(いけい)の意味を示す右肩をあらわにして、右の膝(ひざ)を地に付けて跪(ひざまず)き、身を折り曲げて深々と合掌礼拝しました。そして世尊のお顔をじっと仰ぎ見て次のように申し上げました。

【百十六頁五行】『我等僧の首(はじめ)に居(こ)し、年并(としならび)に朽邁(くまい)せり』 「私たちは僧伽(サンカ)の年長者ですが、修行のおかげで『煩惱』に惑(まど)わされない身となり、『苦』から解脱することができました。しかし、私たちは年を取ったことを理由に、これまでのような修行には今後は堪(た)えられないと思い、／『復(また)阿耨多羅三藐三菩提を進求(しんぐ)せず』これ以上、精進を励み、最も大切な目的である『仏に成る』ということを目指してまいりました」

【百十六頁終四行】「世尊は私どもに教えをお説きくださいましたが、じつは説法の中で、／『我(われ)時に座に在(あ)りて身體(しんたい)疲懈(ひけ)し、但(ただ)空、無相・無作(むさ)を念じて～佛國土を淨め、衆生を成就するに於て、心喜樂(きぎょう)せざりき』」 気だるくなり、『これ以上教えを聞く必要はない』という傲慢(ごうまん)な心でいたこともありました。そして頭の中では『世の全てはただ一つの《空》であり、固定した相(すがた)はない《無相》である。“すべてを平等にみて、あくまで平等に扱ってゆかねばならない”という思索(しやく)だけにとらわれ、世尊が説く『すべての人は仏性を具えており、人の『違(ちが)い』をしっかりと認めて、それぞれにふさわしい教えを自由自在に説き、人格完成の境地に導く』という《菩薩の法》を求めようなどということは致(いた)しませんでした。誠に申し訳ございません」

【百十六頁終二行】「なぜそうであったかと反省(はんせい)しますと、『世の現象にとらわれず、煩(わづら)わされない境地』へと世尊は方便を用いてお導きくださったのですが、私たちは『現象に煩(わづら)わされない』境地だけで満足していました。／『又今(またいま)我等年已(すで)に朽邁(くまい)して、佛の菩薩を教化したもう阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念好樂(こうぎょう)の心を生ぜざりき』」 さらに老いてきたため、『仏の悟りを得る』ように仏さまが菩薩を導く場面を目(ま)の当たりにしても、私たちはそのことに憧(あこ)れ、さらに精進して自ら『仏の悟りを得る』などとは考えませんでした」

【舍利弗への授記を目の当たりにした感動】——

【百十七頁一行】「ところが仏さまが声聞の舍利弗に対して、『必ず仏の悟りを得る』と授記されたことを直接拝見し、私どもはかつてない感激を覚えました。このような大きな利益(りやく)を頂戴することが出来て、心の底から深く感謝申し上げます／『於今(いま)忽然(こつねん)に希有(けう)の法を聞くことを得んとは、深く自ら慶幸(きょうこう)す』。そして今、こうした稀有(けう)のお手配を頂いたわが身を、私は自分自身を祝福したいと思(おも)います。／『無量の珍寶(ちんぼう)、求めざるに自(おのずか)ら得たり』」【(偈)一五頁八行】『無上の寶聚(ほうじゅ) 求めざるに自(おのずか)ら得たり』まさに、はかり知れない無量の『宝』を、求めもしないのに自然と得ることができました」

【百十七頁五行】「世尊よ。私たちが信解(しんげ)致(いた)しましたことを、次に『警(けい)え』をもって申し上げたいと存じます。どうか私たちの領解(りょうげ・信解したことを確認する)をお聞き願(ねが)います。

【『長者窮子(ちやうじゃぐうじ)の警(けい)え』】——

【百十七頁五行】【(偈)一五頁終四行】——「ある人が幼い時、無知であったために、父のもとからさまよい出てしまいました。その後、諸国を放浪し、食うや食わずの貧しい生活を送ることになりました。そうした日々が50年も続きました。／『年既(としすで)に長大して加復(ますます)た窮困(ぐこん)し、四方に馳騁(ちちやう)して以て衣食(えじき)を求め』」 窮子(ぐうじ)は年を重ねるごとに

貧しさを増し、ただ衣食を求めて四方をさまよい続けるのでした。 / (『漸漸(ぜんぜん)に遊行(ゆぎょう)して本國に遇(あ)い向(む)いぬ』) しかし不思議なことに、放浪して行くうちに足は自然と父のもとへと進んで行ったのでした」

【百十七頁終五行】(僞)一五頁終三行「一方、父は子を失って悲しみ、①懸命に子を探しました。しかし、どうしても見つけ出すことはできませんでした。そして、仕方なくある街にとどまることにしました。父の家は繁栄を極め、金・銀・サンゴ・琥珀(こはく)などの財宝が数知れずあり、不自由のない生活をしています。数々の倉庫は貴金属や宝石で溢(あふ)れ、大勢の使用人と役人が仕えています。富の象徴である象や馬、そして牛・羊などの家畜や乗り物も数えきれません。他国との貿易も盛んにおこなわれ、商人や顧客たちが絶えることなく屋敷に出入りしています。父は多くの人々から敬われ、国王からも尊敬を得ていました」

【百十七頁終行】「一方、息子は、すっかり貧窮(ひんきゅう)の身となっていました。ついに、父の屋敷がある街にたどり着いたのでした」

【百十八頁一行】「父はこの50年、②かた時も息子を忘れたことはありませんでした。いつも息子の身を心配していましたが、その胸の内を他人に明かしたことはありませんでした。いつも自分一人で案じ、悩んでいました。そして次のような心配を思いめぐらせていました」

【百十八頁三行】(僞)一六頁四行「『私はもう年老いてしまった。だが数えきれない財産、あふれんばかりの金・銀・財宝を託す子どもがいない。もし私が死んだら、財産は相続されずにむなしく散り散りになってしまおうだろう。そう考えると、いなくなった息子のことが思い出されて仕方ない。あの子がいて財産を任せることができるならば、どれだけ有難いことだろうか』」

【長者(仏)の威徳・威厳】——

【百十八頁六行】(僞)一六頁七行「一方、父の住む街にたどり着いた息子は、とうとう父の屋敷に着いたのでした。そして、門から屋敷内の様子を伺うと、威厳のある男性が座っています。その男性こそ父なのですが、そのことを窮子(くうじ)は知る由もありません。父は立派な椅子に堂々と腰をかけ、悠然(ゆうぜん)と座っています。まわりにはバラモンやクシャトリア、ヴァイシャなどの上流階級(カースト制の上流階級)の人々が仕えています。父は大変高価な真珠の首飾りを身に着け、扠子(ほっす・棒の先に獣毛や麻繊維が付いた法具の一種)を手にした召使いが両脇に立っています。頭上には立派な天幕が張られ、美しい旗が立ち並び、香水と美しい花々がまかれています。宝物がズラリと並べられ、それを人々に与えています。その様子は大変威厳に満ちたものでした」

【凡夫と教えとの関係／仏性の自覚がない凡夫】——

【百十八頁終行】(僞)一六頁終行「父の様子をみて息子は恐怖心を覚えました。とんでもない所に来てしまったと後悔し、次のように思いました。『あのお方は王に違いない。こんな畏(おそ)れ多い所はオレがいる所じゃない。ましてやオレのような者を雇ってくれる所でもない。貧民街に行けばオレに見合った仕事がある。こんなところに長居(ながい)していると、捕(つか)まえられて強制労働をさせられるだろう。早く逃げ出さなければ!』と、走って逃げ出しました」

【百十九頁五行】(『子を見て便(すなわ)ち識(し)りぬ』) (僞)一七頁五行 (『黙(もく)して之(これ)を識(し)る』) 「その時、父は逃げ出すその子を見て、③一瞬にしてそれが我が子であることに気づきまし

た。父は喜びで心が弾(はず)み、こう思いました。『やっと私の財産を任せる者がやって来た！今まで探し出せなかったが、子どもの方から私の所へ帰って来てくれた。これで私の願いをかなえることが出来る！私は年をとってしまったが、今でも子どもへの愛情は変わるものではない。大変深いものだ』と。そう思った父は家来(けらい)に、その子を④連れて来るように命じました。家来は大急ぎで追いかけて、そして窮子(ぐうじ)を捕(とら)えました」

【百十九頁 終四行】「ところが親の心を知らない窮子は、突然つかまえられることに驚き、『私は何も悪いことをしていません！なぜ、つかまえるのですか！』とわめき叫びました。窮子が暴(あ)れ出したために、家来はますます力づくで取り押さえます。そして無理矢理連れ去ろうとします。窮子は『何の罪もないオレをこうしてつかまえるのは、きっと殺されるに違いない！』そう思うと恐怖のあまり、とうとう窮子は気絶して倒れてしまったのでした」

【一〇二頁 一行】「その有り様を遠くから見ていた父は、家来に命じ直し『もう⑤その子を無理に連れて来る必要はない。⑥冷たい水を顔にかけて目を覚ましてやりなさい。 / (『復(また)與(く)みし語ることなかれ』) そして⑦正気に返っても何も話してはいけない』と告げました。なぜ父がそう命じ直したのかと言いますと、⑧その子が父のような高い地位に近寄れない卑屈(ひくつ)な心になり切っていることを悟ったからであります。そしてわが子であることはハッキリと解(わか)っていましたが、しかしそのことを⑨他人には打ち明けませんでした。」

【一〇二頁 五行】「家来は長者の命ずるとおりに水をかけ、窮子(ぐうじ)の目を覚まさせてやり『許(ゆる)してやるから、好きな所へ行け』と言いつちました。窮子は起き上がって逃げ出し、そそくさと貧民街へと向かいました。そして衣食を求めるその日暮らしの日々を、ふたたび送るようになりしました」

【一〇二頁 七行】【(備)一〇七頁 終四行】「それからしばらくして父は我が子を引き戻すために、貧民街にいる子どもの所へ⑩みすばらしい身なりをした二人の召使(めいし)いを差し向けました。一人は片目が見えず、もう一人はくる病で小児(こに)のような小さな体格となった男です」

【一〇二頁 七行】【(備)一〇七頁 終三行】「長者は二人の召使(めいし)いに次のように申し付けました。『あの男の所へ行つて⑪『良い仕事がある。賃金は倍だ』と言いなさい。もし男から『どんな仕事か？』と問われたら、『⑫糞尿(ふん)を処理し、ドブなどの掃除をする汚い場所の仕事だ。そして⑬俺たちも一緒に仕事をするのだと告げなさい』と命じました」

【一〇二頁 終行】「二人の召使(めいし)いは貧民街で窮子を見つけ出して、言い付けどおりに告げました。すると窮子はその話を受け入れ、喜んで長者の屋敷についてきました。そして⑭最初に賃金を先払いで受け取り、それから汚物掃除を始め、一生懸命働きました。しかし、不浄(ふじやう)の仕事をしているわが子のあわれな姿を見て、父は悲しくもありました」

【人を救う順序】――

【一〇二頁 二行】【(備)一〇七頁 終行】「しばらくして、父が窓から子の様子を見ると、窮子はすっかりやせ衰え、体中を糞尿(ふん)で汚して働いています。それを見た父は不憫(ふびん)さがつのりました。 / (『即(すなわ)ち瓔珞(ようらく)・細軟(さいなん)の上服(じょうふく)・嚴飾(ごんじき)の具を脱いで、更に麤弊垢膩(そへいく)の衣(ころも)を着(き)、塵土(じんど)に身を全(けが)し、右の手に除糞(じよふん)の器(うつわ)を執持(しゅうじ)して』) 【(備)一〇八頁 一行】『弊垢(へいく)の衣(ころも)を着(き)、除糞(じよふん)の器(うつわ)を執持(しゅうじ)して』

（うつわ）を執（と）って』すると父はあろうことが、**15** 豪華な首飾りや着物を脱ぎ捨て、不浄で汚い着物を身にまといました。そして泥で身を汚し、右手に糞尿を取る器を持って、**16** 窮子のもとへやって来ました。そして窮子に**17** 『頑張ろう。しっかり働いて、怠（なま）けてはいけないよ』と励ましの声をかけたのでした」

【人が救われる順序】――

【一頁六行】「こうして窮子に近づき、**18** 窮子と一緒に働くことが出来た父は、我が子に対して語りかけたのでした。『**19** お前は可哀相だな。食べることに困っているじゃないか。しかしこれからは大丈夫だよ。ここは**20** 賃金が上がる所で、しかもお前に必要な食料や生活用品はいくらでもある。さらには**21** 年を取った使用人もいるから、必要だったら世話をしてもらえ。ちゃんと生活ができるので**22** 安心してずっとここにいと良い。私は年を取ったが、お前は若くて息子の年頃だ。私は**23** お前を身近に感じるよ。これから**24** 怒ったり人を恨んだり、憎まれ口をきいてはいけないよ。／（『都（すべて）て汝が此の諸悪有らんを、餘（よ）の作人（きにん）の如くに見じ』）**25** お前はほかの人と違って悪い所が無い。’**26** もしお前が悪いことをしたら、私は悲しいよ。これからは**27** お前を我が子のように思うからね』と言って、**28** その場で窮子の名前を付けてやり、仮の子にしたのでした。」

【一頁七行】「窮子は思いがけない待遇に大変喜びましたが、それでも自分は雇われの身の労働者で、自分を卑（いや）しい人間だと思う卑屈な根性は抜け出せませんでした」

【一頁八行】（備）【二頁五行】（『二十年の中（うち）に於て常に糞（あきた）を除（はら）わしむ』）「それから**29** 20年の長い間、長者は窮子に不浄の仕事の続けさせました。長者は大きな智慧を用いて、窮子をだんだんと**30** 屋敷に自由に出入りするよう仕向けました。そしてこの20年が過ぎると、窮子にとってはその家に対する心安さが生じ、屋敷に出入りすることにおびえを感じないようになり、オドオドしなくなりました。でも、窮子が住んでいる場所は最初に与えられた小屋のままでした」

【一頁九行】「それからしばらくすると長者は病気になる、自分の命はそう長くはないことを悟った長者は窮子を呼び、『私は莫大な財産を持ち、金銀財宝が倉庫の中に入りきれないほどある。**31** その“財産管理”すべてをお前に任せたい。だから財産の一切を知り尽くして欲しい。なぜこの大切な仕事を任せるのかと言えば、／（『今我と汝と便（すなわ）ち爲（こ）れ異らず』）もう**32** お前と私は他人行儀をする関係ではない。だから任せるのだ。どうか**33** 無駄に財産を使わないように注意をして欲しい』と申し渡しました」

【一頁終五行】「窮子は長者の言い付けどおりに倉庫の金銀財宝をしっかりと管理し、財産のすべてのありようを熟知（じゅくち）するようになりました。／（『而（しか）も一餐（いっさん）を桶取（けしゅ）するの意（こころ）なし』）財産の全てを知った窮子は、ほんの一度の食事代すらごまかして自分のものにしようとはしませんでした。しかし住まいは依然として小屋のままであり、自分を卑（いや）しい人間だという卑屈な根性は、抜け切れずにいました。さらには、これらの財宝が自分のものであるとは夢にも思いませんでした」

【一頁終七行】（備）【二頁七行】「それからしばらくののち、子の心が広く悠然（ゆうぜん）となり、卑屈な心もなくなり、全財産をしっかりと管理・運用できる能力を具えたことを父は理解しました。

そして父は自分の死期が近くなったことを悟ったその時、子に命じて③④親族・国王・大臣・武士・家臣・実業家など、交誼(こうぎ)を持つすべての人々を集めるよう命じました。」

【一三頁二行】(備)一八頁終四行「そして、集まった人々を前にして③⑤父は、次のような重大な発表をしました。『みなさん。よく聞いてください。この男はじつは私の実の子どもであります。私がある城にいた時、この子は私の元からさまよい出てしまい、生活に苦労し、落ちぶれ、50年の間、放浪しました。この子の本当の名前はこれこれで、私の本当の名前もこれこれと言います。この子がいなくなった時、元の城にいた私は大変心配し、わが子を一生懸命探しましたが残念ながら見つけ出すことは出来ませんでした。ところがこの街で偶然に出会うことが出来たのです。この者は本当に私の子です。そして私はこの子の実の親です。ですから、私が所有する全ての財産は、みんなこの子のものです。しかもこれまでにこの子には、財産の支出・収入など一切の運用・管理を任せていましたので、この子はその全てを熟知するに至っています』と告げたのでした」

【一三頁七行】(備)一九頁一行「窮子は父の言葉を聞いて、言いようのない歓喜を覚えました。今まで経験したことのない喜びでした。そして心の中でこう思いました。『私は、こうなりたいなどとは少しも考えたことはなかった。／(『今此(いまこ)の寶藏(ほうぞう)、自然(じねん)にして至りぬ』)しかし、この素晴らしい莫大な財産が、自然と自分のものとなった。なんと不思議なことであろう。なんと有難いことだろう。誠にもったいないことだ』と心から感激したのでした」

—— 以上 【『長者窮子の警え』】

【『長者窮子の警え』のかみしめ】——

「世尊よ。私どもが信解(しんげ)致しましたことを、この警えをもって申し上げました」

【一三頁終四行】「世尊よ。この大長者はまさに世尊でございます。私どもはみな世尊の子であり、実際に世尊はこの大長者のように、／(『如来常に我等を爲(こ)れ子なりと説きたまへり』)我々を我が子であるとおっしゃって下さいました」

【窮子の愚かさ、凡夫の愚かさについて】——

【一三頁終二行】(『我等三苦を以ての故に、生死(しょうじ)の中に於て諸の熱惱(ねつのう)を受け、迷惑無知にして小法に樂著(ぎょうじゃく)せり』)「世尊よ。私どもは本能的に感じる感覚的な苦(例:喉が渇いて苦しいとか、重い荷物を背負って苦しいと感じる苦痛)《苦苦・くく》、楽しみが取り払われた時に感じる苦(それがある時は楽だが、それが無くなると感じる苦痛。例:お金や恋人などを失った時に感じる苦痛)《壞苦・えく》、ものごとの変化によって生じる苦(例:老いて感じる苦など、諸行無常によって生ずる苦。現在の状態に執着するために生じる苦で、変化に順応できない)《行苦・ぎょく》の三つの苦しみ《三苦・さんく》に苛(さいな)まれており、流転(るてん)極まりない人生を歩み、様々な変化に、激しく悩み・苦しみに溺(おほ)れています。なぜ、その悩み・苦しみに振り出せないのかといえは、それは真理を知らないために起こるものだからです。ですから真理をわかっていない私たちは、その苦の解決をするためにはどうして良いかを解らず、結果的に目先のことを考え、真理とは程遠い低俗な教えにすがってしまい、苦の解決だけを模索していました」

【四大声聞があらためて懺悔。世尊が『仏に成れる』と説かなかった理由】――

【一三頁終行】『諸法の戲論(けろん)の糞(あくた)を蠲除(けんじょ)せしめたもう』「世尊は、真理をお説き下さり、そのおかげで私どもは、ちゃんと真理に基づく思考・捉え方ができるようになり、心の塵芥(ちりあくた)を払うことができました。そして私たちは、／『勤加精進(ごんかしょうじん)して、涅槃に至る一日の價(あたひ)を得たり』昨日よりも今日、今日よりも明日へと精進を積み重ねていくことが出来、心の平安を頂くことが出来るようになりました」

【一四頁二行】「しかし残念なことに、私たちは苦から離れる『心の平安』を得るだけで満足していました。【(偈)一三〇頁四行】／『一切の諸法は皆悉く空寂にして無生・無滅無大・無小無漏・無爲なり是の如く思惟して喜樂(きぎょう)を生ぜず』ものごとには差別などない『ただ一つである』という《空》の教えを、自分の思索・頭の中でとどめて『心の平安』を得ることだけで満足しきっていました。ですから私が『仏に成る』、『仏の悟りを得る』などとは思いません、【(偈)一三〇頁六行】／『復(また)志願なし』求めようとしませんでした。／『涅槃一日の價(あたひ)を得て、以て大(おおい)に得たりとして、此の大乗に於て志求(しご)あることなかりき』私たちは苦にとらわれない心の安定を、その日、その日に得るだけで満足していたために、最高の悟りを得ようという志を起さなかったのです」

【一四頁五行】【(偈)一二九頁三行】「ですから世尊は、こうした私たちの心、これまでの精進の在り方をご承知ですので、小さな悟りで満足しきっている私どもに対して、／『爲に汝等(なんだち)當(ま)きに如来の知見・寶藏(ほうぞう)の分あるべしと分別したまわず』『お前たちは如来と同じ悟りが得られるのだ』とは、あえておっしゃられなかったのです」

【仏の大慈悲が分かった四大声聞の喜び。無量の智慧を得た感激】――

【(偈)一二九頁五行】「世尊は、『最上の悟りを求めて修行をする者は、必ず仏になることができる』と仰せになっていました。そして最上の悟りを得るために、／『諸の因縁 種種の譬諭 若干(そこばく)の言辞(ごんじ)を以て 無上道を説く』世尊は、さまざまな実例や体験に基づいて説く『因縁説周』、『譬えを引いて説明する譬説周』、そして理論的に説き示す『法説周』を用いて、『最高無上の教え』をお説きくださいました。まさに『三周の説法』を尽くしてご教示くださったのです」

【一四頁終二行】【(偈)一三一頁四行】『今我等方(ま)きに知んぬ、世尊は佛の智慧に於て憐愍(りんじやく)したもう所なしと』「今、ハッキリと解りました。世尊は私どもに対して惜しみなく『仏の智慧』をお与えくださり、『大乘の教え』をお説きくださっておられたことがよく分かりました。／『今此の經の中に唯一乘を説きたもう』そしてこの法華經において、世尊は『教えはただ一つしかない』とお示しくださいました。今までの私どもは、理解する力が至らないために、世尊がお説きくださる教えを小さくしか受け止めることが出来ないうでした。しかし今こそ私たちは、この大切な教えをしっかりと受け止めさせて頂くことが出来ます。今、私どもはこれまで経験したことのない大歡喜を覚えています。／『今法王の大寶(だいほう)、自然(じねん)にして至れり』そして、自分では求めもしなかったのに、大きな宝を自然と自分のものとなり、大変感激を致しております」

【仏の大慈悲に対する感謝と決意】——

【(偈)一三頁五行】『我今 道(どう)を得(え) 果を得 無漏(むろ)の法に於て 清淨の眼(まなこ)を得たり
～今無漏(むろ) 無上の大果を得(じ)』「世尊よ。今、私どもは『本当の仏道』を知りました。修行の『本当の結果』を得ることが出来、《諸法実相》の教えによる『真実のものの見方・清らかなるもの見方』を悟らせていただくことが出来ました。私たちは今こそ真の声聞・阿羅漢の身となりました。／『佛道の聲(こゑ)を以て一切をして聞かしむべし』そして一切の人々に仏に成る道を説かせて頂きたいと思ひます。人間界の全ての人々とどまらず、神々や鬼神、天上界の人々からも尊敬を受ける身であります」

【(偈)一三頁終行】『世尊は大恩まします』「世尊には大恩がございます。得難い法に我々をお説きくださり、最上の利益(りやく)をくださり、そのご恩には何万年を費やしてもお報いできません。たとえ全生命を投げ出してお仕えし、一切を捧げて供養を尽くしても、そのご恩にお報い出来るものではありません。／『恒沙劫(ごうじゃく)に於てすとも 亦報(またほう)ずること能わじ』無限の時間をかけてあらゆるご供養を申し上げても、世尊の尊いご恩にはお報いすることが出来るものではございません」

【仏の大徳を讃嘆。仏への感謝】——

【(偈)一三頁六行】「諸仏はこの世に類稀(たぐいまれ)な尊いお方であります。はかり知れない大神通力を具え、／『無漏・無爲にして 諸法の王なり』一切の迷いから離れ、最高の真理を悟っておられる『法の王』であります。ですから、機根の低い者や、／『取相(しゅそう)の凡夫に 宜しきに隨(したが)って為に説きたもう』現象にとらわれてしまう凡夫に対しても、相手の段階にふさわしく、相手の欲望や程度にしたがって意のままにお導きをくださいます。／『宿世の善根に隨(したが)い 又成熟 未成熟の者を知しめし』しかも仏は、その人が前世にどれだけの善根を積んでいたのか？ それによって現世において教えを聞く力がどれだけ熟しているかを、明らかに見通されています。／『分別し知(しる)しめし已(おわ)って 一乗の道(どう)に於て 宜しきに隨(したが)って三と説きたもう』そして、ただ一つしかない『真理の教え』、『仏の道』を相手の機根に合わせて適宜に三つに説き分けてお導きくださるのであります。本当に有難うございませう」と、摩訶迦葉(まか かしょう)ら四大声聞たちは、世尊に『法悦と感謝』を申し上げたのでした。



『^{しんげほん}信解品』の意味。何を信解したのか。

(P353・4行/P269・3行)

(四大声聞は)何を完全に信解したのかといえは・・・、

第一に、《方便品》で説かれた教えです。つまり、**諸法実相**のことです。

第二に、〈仏はさまざまな方便をもちいて、教えを説かれるけれども、つまるところは、**すべての人びとに自身の仏性を発見させ、仏の境地を悟らせてくださる一事に帰するのだ**〉ということです。～(これらのことを)悟得(ごとく)しただけでなく、「このように悟りました」ということを、くわしく世尊のおん前に表白します。

『但空、無相・無作を念じて、菩薩の法の遊戯神通し、佛國土を淨め、衆生を成就するに於て、心

喜樂せざりき』

(百十六頁 終四行)

平等と差別の両面を見る

(P362・3行/P275・終2行)

これ(すべてを平等に見ること)は、ひじょうに高い思想にちがいないのですが、それだけにとらわれてしまうと、実際の教化・救済の活動にブレーキがかけられることとなります。

～(千差万別の)その差別相をあきらかに見分けて、それぞれの人にふさわしい教えを方便して説かなければ、教化・救済の効果があらわれるはずはありません。

こうした教化・救済の活動

こそ(菩薩の法)なのです。菩薩の法とは、つまるところ、人びとの差別相を心の奥までハッキリと見通し(神通)、それにピッタリ合った教えを自由自在に説き(遊戯・ゆげ)、世の中を美しく平和にし(仏國土を淨め)、すべての人びとの人格を完成(衆生を成就)することにあるわけです。

※『諸法如實の相を觀じ、亦不分別を行ぜざる。是れを菩薩摩訶薩の行處と名く』

(『安樂行品』二四一頁 終二行)

《愚惟のひととき ①》

「ものごとを『平等』でみることは尊いことだが、それだけで終わってしまうと、教化・救済の効果はあがらない。大切なことは千差万別の違いを正しく見分けて、それぞれにふさわしい教えを方便として説くことだ。また、「(菩薩の法)とは、人々の違いをハッキリと見通し、それにピッタリと合った教えを自由自在に説き、世の中を幸せにし、すべての人の人格を高めていくこと」だと庭野開祖は説きます。

—— この「個別の違いを正しく見極めることが大切だ」という教えを、あなたはどのように受け止めますか。かみしめてみましょう。

『又今我等年已に朽邁して、佛の菩薩を教化したもう阿耨多羅三藐三菩提に於て、一念好樂の心を生ぜざりき』 (百十六頁 終行)

「また年齢を重ねて老いぼれてしまったために、仏さまが菩薩たちを『仏の悟りを得るように導く』という有難い情景を目(ま)の当たりにしましても、私どもは『仏の悟りを得る』ことを心から憧れ、願うなどという考えを、まったく起こさなかつたのでございました」

《^{しんがい}患難のひととき ②》

四大声聞は「年をとったために『仏の悟りを得る』ということを中心から憧(あこが)れ、願うことはなかった」と懺悔しています。

年齢を重ねるだけでなく、信仰の年月が長くなると、ともすると精進自体がマンネリ化し、信仰の本来の目的である『仏の悟りを得る』ということをおろそかになることもあり得るかもしれません。

—— この四大声聞の懺悔を通して、果たして今の自分の信仰姿勢は、本当に『仏の悟りを得る』ことを願い、目指しているか？ 振り返ってみましょう。

『^{いまこつねん}於今^{けう}忽然に^{きゆうこう}希有の法を聞くことを得んとは。深く自ら慶幸す』

(百十七頁 三行)

「今、こうして稀有(けう)の貴重なお手配を頂けたこと(『諸法実相』の真理を伺い、そして自分と同じ声聞の境地の舎利弗に成仏の保証を頂いたことを目の当たりにしたこと)は、まったく予想もしていなかったことで、このような掛け替えのない大きな利益(りやく)を頂戴することが出来て、心の底から深く感謝申し上げます。そして、こうした稀有(けう)のお手配を頂いたわが身を、私は自分自身を祝福したいと思ひます」

《^{しんがい}患難のひととき ③》

四大声聞は、『諸法実相』の真理を聞けることができ、かつ、自分と同じ声聞の境地である舎利弗に成仏の保証を頂いたことを目の当たりにして、「こうした稀有(けう)のお手配を頂いたわが身を、私は自分自身を祝福したいと思ひます(『深く自(みずか)ら慶幸(きょうこう)す』)」と、自分で自分を褒(ほ)め、祝福しています。

—— では今世、『^{あいに}遭(あ)い難(がた)き尊(たか)い仏縁』、『庭野開祖・庭野会長という尊(たか)い法縁』に^あ遭(あ)い得た自分自身を褒(ほ)め、祝福しているか？ またご自身の精進のうえで、「自分自身を誉める」ことがあるか？ 振り返ってみましょう。

^{ちやうじゃぐうじ}長者^{たと}窮子の譬え

(P367・1行/P279・終5行)

『^{あちやう}四方に^{えじき}馳騁して以て衣食を求め』 (百十七頁 七行)

あちこちと駆(か)け回っては、衣食の糧(かて)を求めていました。

『^{ねはん}涅槃^{あた}一日の價を得て、^{もつ}以て大に^{おおい}得たりとして、此の大乗に於て志求あることなかりき』

(一四頁 七行)

私どもは苦にとらわれない『心の平安』を頂くことができ、その日その日に功德を頂くだけで満足していました。ですから私どもは今以上の最高の悟りを得ようなどという志も起こさなかったのです。

るろう 流浪のあげくの回心^{えしん}

(P370・4行/P281・終3行)

煩惱の世界をさすらい歩いたことを悔(く)いる必要はありません。回心(えしん/心をあらためて、正しい道に入ること)さえすればいいのです。～ 煩惱というものを、自分の向上と社会の進歩のための踏み台として生かすことができます。 註:「回心」と「改心」の違い

ほとけ 仏はいつもそばにいる

(P389・終4行/P297・5行)

仏は、事実いつも我々のそばにおられるのです。言いかえれば、我々を生かしている仏の慈悲は、常にあらゆるところに満ち満ちているのです。それなのに、われわれはそれに気がつかない。気がつかないために、いろいろと不自然な心をおこしたり、道にはずれた行ないをして、煩惱のカラをつくり、その中にとじこもってしまうのです。そのために病気・不和・貧乏というような人生苦がおこってくるのです。～

とにかく仏さまは常に我々のそばにいらっしゃるのです。ですから、自分で作った煩惱のカラを取り払いさえすれば、仏の慈悲はいつでも我々を温かく包んでくださっていることがわかるのです。

《患^{ゆい}惟のひととき ④》

「仏はいつもそばにいてくださる。それなのに、われわれはそれに気がつかない。気がつかないために、いろいろと不自然な心をおこしたり、道にはずれた行ないをして、煩惱のカラの中にとじこもってしまうのです。そのために病気、不和・貧乏というような人生苦がおこってくるのです」と庭野開祖は説いています。—— この開祖の指導を、あなたはどのように受け止めますか? かみしめてみましょう。

ほんのう 煩惱のカラを除くには^{のぞ}

(P391・3行/P298・7行)

どうしたらカラ(煩惱のカラ)を取り除くことができるのか? 言うまでもなく仏の教えを学び、実践し、自分が『仏の子』であることを悟ることです。～

とにかく、我々が仏に気が付かなくても、仏は決して我々を忘れてはいないのだということ、これは絶対の真理であります。～

どんなに背(そむ)こうとも、背いてから何十年たとうとも、仏は衆生に対して変わらぬ愛情をもってじっと見守り続けていてくださるわけです。涙が出るほど有難いことです

『長者獅子の座^{しし}に於^ざて、子^{おい}を見て 便^{すなわ}ち識^しりぬ』 (百十九頁 五行)

『我^{としく}年朽ちたりと 雖^{いえど}も猶^な故^{おとんじゃく}貪^く惜^す』 (百十九頁 終五行)

おもむ
徐ろにみちびく

(P402・終5行/P307・4行)

【人を導く時の第一】 ① 『徐(ようや)く窮子に語るべし』 (一〇二頁 終四行)

… 短兵急(たんべいきゅう)に切り出すと警戒されますから、はじめはさり気なく話かけて、だんだんと話をまとめていく～。

げんせりやく と ひつよう
現世利益を説く必要

(P403・2行/P307・終7行)

【人を導く時の第二】 ② 『倍(ま)して汝に價(あた)いを與(あた)えん』 (一〇二頁 終四行)

… 凡夫に向かって、はじめから高尚なことをいってみても、なかなか心は動きません。まず現世利益について話をし、それを導きの第一歩とすることも方便の一つであることが、ここに示されているのです。～ 宗教活動というものは、生きた人間を相手にした血みどろな闘いです。

※「示教利喜」(『化城論品』一七二頁 一行/『五百弟子受記品』一八四頁 二行/『隨喜功德品』二九六頁 終行/『囑累品』三三三頁 四行)

《患(わづ)惟(ただ)のひととき ⑤》

人を導く時、「①『徐(ようや)く窮子に語るべし』という始めはさり気なく話かけて、だんだんと話をまとめていく。次には、②『倍(ま)して汝に價(あた)いを與(あた)えん』という、まず現世利益について話をし、導きの第一歩とすることも方便の一つ」であると庭野開祖は説きます。(※『示教利喜』) さらには「宗教活動というものは、生きた人間を相手にした血みどろな闘いです」とも説いています。このことは「生きた人間を導くことは、『真剣勝負だ』との意味だとも申せます。

— あなたはこの庭野開祖の① ②の説示(せつじ)をどのように受け止めますか？
噛み締めてみましょう。

『麤弊垢膩(そへいくにころもき)の衣(き)を着、塵土(じんど)に身を塗(けが)し、右の手に除糞(じよふん)の器(うつわ)を執持(しゅうじ)して』(一〇二頁 四行)

「すると父はあろうことか自らの豪華な首飾りや着物を脱ぎ捨て、不浄で汚い着物を身にまといました。そしてわが身を泥で垢まみれにし、右手に糞尿を取る器を持って窮子のもとにやって来ました」

(P407・2行/P310・8行)

この長者の行為は、仏さまのこの世への出現を象徴しているのです。柔らかい絹の服を着ている身でありながら、わざわざボロをまとい、泥を顔や手足になすりつけ、糞(あくた)をとる器を持って、便所で働く人びとの中に入ってこられたのです。なんとかしてわが子(衆生)を引き上げてあげようという大慈悲心からです。

つくづくそれを思えば、涙がこぼれてくるのをどうすることもできません。

《^{しゆい}患惟のひととき ⑥》

長者が「麤弊垢膩(そへいくに)の衣(ころも)を着て、右手に除糞(じよぶん)の器(うつわ)を持って」現われること。すなわち仏の大慈悲心を — あなたはどのように受け止めますか？ 噛み締めてみましょう。

すく すく 救い救われる順序 ^{じゆんじよ}

(P410・3行/P313・2行)

- ①【慈悲に出発】 第一に長者は『咄(つたな)や男子(なんし)』と言っています。人を救う第一歩は、ああかわいそうだと心の底から湧いてくる情け心(慈悲の心)でなければなりません。
- ②【心のより所を与える】 第二に長者は、所帯道具や食料をあげるから、疑ってはいけないと安心させました。『諸(もろもろ)の所須(しよしゆ)ある盆器(ぼんき)・米麴(まいめん)・塩酢(えんそ)の属(たぐい)あり、自ら疑い難(はばか)ることなかれ』。信仰を持たばちよとした変化にも一喜一憂しない安心の境地を得ることができます。～ 人を仏道に導こうとする時は、何よりもまず、「この教えに入れば安心が得られますよ」と言ってあげねばなりません。
- ③【境遇を左右する境地】 第三に長者は、使用人を付けても良いと言います。『亦(また)老弊(らうへい)の使人(つかいびと)あり、須(もち)いば相給(あいたま)わん』。今まで人に使われてばかりいた窮子にとっては、人を使うようになるという人生 180 度転回する画期的な変化です。信仰を持たば、境遇に対して自由自在を得ることができます。(境遇に振り回されることがない)
- ④【仏に生かされている！】 第四に長者は『我汝が父の如し、復(また)憂慮(うりよ)することなかれ』と言います。「自分を生かしているのは仏であることを悟れ！」ということです。本当の神・仏というものは～ 内外(うちそと)の区別なくこの宇宙間に遍満(へんまん)し、すべてのものを生かしている大生命なのです。～ つまり「自分を生かしているのは仏(宇宙の大生命)であり、あなた自身もまた仏の現れた」ということを知ることができます。

《^{しゆい}患惟のひととき ⑦》

庭野開祖は『救い・救われの手順』を、①『慈悲』→ ②『心のより所・安心』→ ③『境遇に振り回されない自由自在の境地』→ ④『仏に生かされている・自分自身も仏である』だと示し、私たちもこの4段階の手順に基づいて、『救い救われの手順』を、現在歩んでいると申せます。 — では私は、どの段階を歩んでいると思いますか？ 噛み締めてみましょう。

きこん 機根の熟するを待つ ^ま

(P418・6行/P319・4行)

長者(仏)の方便の素晴らしさです。決して焦らずその人の機根の熟するのを待つのです。機根の熟さぬうちに、急いで打ち明けてみたところで、かえって不幸におとし入れるばかりだからです。

しんぼうづよ しゅぎょう
辛抱強い修行

(P419・2行/P319・終6行)

窮子には窮子の偉さがあります。とにかく二十年以上もの間、汚いところの掃除（煩惱を除く修行）をコツコツと続けてわき目も振らないところは、なみの人間ではできないことです。～ 四大声聞も同じで、煩惱を除く修行を黙々と続けて退転することがなかった「誠実さ」「辛抱強さ」に感嘆せざるをえません。凡夫の身としては、まずその態度に学ぶところがなければなりません。

あいつう
仏と相通ずる気持ち

(P420・4行/P320・6行)

『心相體（こころあいたい）信（しん）して入出（にゅうしゅつ）に難（はばか）りなし』（一・二頁 三行）

—— まことに素晴らしい言葉です。

さすがに二十年以上もたったら、親子の間にはいうにいわれぬ親しみと信頼感ができてきました。『心相體（こころあいたい）信（しん）して』というのがそれです。「體（体）」とは親しみ、「信」というのは信頼感です。～ これはじつに大切なことです。お釈迦さまは我々の大恩教主ですから、あくまでも尊び敬わなければなりません。～ しかし、仏を他人行儀に畏（おそ）れ、はばかることはないのです。～ 一体の存在として、親しみと信頼感をもって、全身全霊が通い合うというのでなければ、ほんとうではありません。

たにん
仏と・は他人ではない

(P424・終4行/P323・終7行)

『今我と汝と便（すなわ）ち爲（こ）れ異ならず』（一・二頁 七行）

「今こそ、私とおまえは別人ではないぞ」というお言葉です。まさしく、仏と衆生とは別人ではありません。それを、われわれ衆生が知らないだけのことです。

しねん いた
自然にして至りぬ

(P436・4行/P332・5行)

『自然（じねん）にして至（いた）りぬ』（一・二三頁 終四行）

—— じつに素晴らしい一句です。

とにかく、悟ろうとカんだり、あせったりするのはムダです。それより教えを少しずつでもいいから、絶えず実践してゆくことです。そうしているうちに、自然と人格が磨かれてゆき、光がでています。自分は光っているつもりではなくても、はたからみれば、美しい輝きを発しているのです。

何よりもまず思惟せよ

(P446・4行/P339・5行)

そこでお釈迦さまはまず、『思惟(しゆい)して諸法(しよほう)の戲論(けろん)の糞(あくた)を蠲除(けんじょ)せしめたもう』(一三頁終行)ことを教えられました。

何よりもまず「思惟せよ」と教えられたのは重大なことです。何かを拜めとか、誰かに頼めとは決しておっしゃらないのです。「よくよく考えなさい」というご指導なのです。この世界は、一体どんな成り立ちになっているのか、人間とは一体どんな存在なのか—— そういう根本的なことがらについて、じっくり考えなさいと言うのです。

※『過去を追うな、未来を願うな。過去は過ぎ去ったのであり、未来ははまだ至っていない。現在の状況をそれぞれによく観察し、明らかに見よ。今なすべきことを努力してなせ』

— 釈尊 『中部経典』 —

※庭野開祖は17才で上京する時、先に東京で成功している人を頼るのではなく、自らを確立するために『六つの誓い』を立てた。(1、これからは、けっして嘘はつくまい。2、かいっぱい働こう。3、他人の嫌がることを進んでやろう。4、他人と争わぬこと。どんなひどい目にあっても、神仏の思召しと思って辛抱すること。5、仕事をする時は、人が見ていようとまいと、陰ひななく働くこと。6、どんなつまらない仕事でも、引き受けた以上は最善をつくすこと)

《思惟のひととき ⑧》

何か事が起こると、この世の成り立ち(縁起観)を通して「よくよく考える」ことが大切だと庭野開祖は説かれています。

— では、果たして私はいかがでしょう？ 何か事が起こると、そのことを「縁起観」を通してとらえているか、それとも自分中心の価値観で考えているのか。振り返ってみましょう。(自分中心のわがまま、損得、善悪の基準で物事を考え、人のせいにする受け止め方はしていないか。「縁起観」で受け止めようとしているだろうか?)

懺悔の功德

(P458・終4行/P348・6行)

こういう懺悔ができるということは、さすがに大声聞だけあります。この率直な告白の態度は、信仰者としておおいに学ばなければなりません。

懺悔というのは、信仰の証となるものです。～ (人には説いても、自分自身はいっこうに大乘を求めぬ気持ちはなかった — 宗教家が、必ずしもその教えの実践者であるとはいえない)

黙して之を識る

(P474・4行/P361・4行)

『黙(もく)して之(これ)を識(し)る(し)』。われわれ衆生に対する仏さまのお心です。～ 仏さまの方では、常にわれわれを黙して識(し)っておられるのです。ありがたいことです。

※『世尊は衆生深心の所念を知り』

(『化城喻品』一五七頁終行)

『唯佛世尊のみ能く我等が深心の本願を知しめせり』

(『五百弟子受記品』一八三頁終三行)

ない めつ げ めつ 内の滅 外の滅

(P492・4行/375・終2行)

心内(しんない)の滅度。自分の心の中の煩悩を滅し尽くして、安らかな心境を得ることです。これも確かに滅度には違いないのですが、まだ十分な滅度ではありません。これに<外(げ)の滅度>が加わって、初めて完全な滅度といえましょう。<外(げ)の滅>とは、他の人びとの間の差別感を滅することです。自他一体の実感を得ることです。さらにすすんで、天地万物に対する差別感を無くし、天地万物とひとつ心に溶け合うことです。

ほ きつ ほんのう 菩薩と煩惱

(P509・終3行/389・5行)

無漏の境地(むろ・諸法実相を悟ることによって、煩悩から超越した状態)から煩悩をどう見るようになるかと言えば、煩惱というものは、この世界が絶えず変化しながら大きな調和を保って進んでゆく、その巨大な運動のエネルギーの一種だと見ているのです。ですから、煩惱ということをと、とりたてて問題にすることがなくなります。

しん げ 信と解

(P529・4行/403・終8行)

信仰とか宗教とかいうものは理屈ではない、信じなければならぬとよく言いますが、何にも分らずにただ信ずるといのは、大変危険なことです。～ よい教えであっても、わけも分らずにただ信じ込んでいたのでは、何かのきっかけで、その信仰がくずれてしまうこともあり得ます。～ そんな信仰は、本当の「固い信仰」ではなく、「頑固な信仰」にすぎなかったのです。～ その『真理を理解する』ということが『解』(げ)にほかならないのです。

『仏法の大海は、^{たいかい}信に^{しん}能入^{のうにゆう}なし、^ち智を^{のうど}能度となす』 (『大智度論』 卷一)

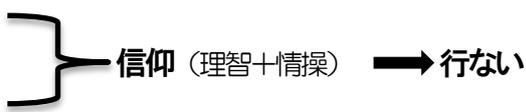
※《能入》とは「能(よ)く仏道に入る」。《能度》とは「能く度(すく)う」の意。

『信有^あって解^げなければ無明^{むみょう}を増長^{ぞうちょう}し、解^げ有^あって信^{しん}なければ邪見^{じゃけん}を増長^{ぞつちょう}す。信解^{しんげ}円通^{えんつう}して方^{まさ}に行^{おこ}

ないの本^{もと}と為^なる』 (『涅槃経』)

仏法を学んで理解が深まってくると、自然とこの情操というものが生まれてきます。その宗教的情操を一般に「信仰」と呼んでいます。～ 人を救うエネルギーが生ずるのです。～ 必ず『信・解』両方を兼ね備えるようにならないと本当に力ある信仰にはならないのだということ、しっかりと胸に刻んでおいていただきたいと思います。 (P534・2行/406・終4行)

信 (しん 感情)
 +
 解 (げ 理智)



つまり<信>と<解・げ>と両方兼ねそなえ、それが円通しなければ、**本当の信仰**とは言えないわけです。～ ですから、何よりもまずその教えをよく学び理解することが大切です。そうすると、そこから自然に<信>が生まれ、その<信>が<解・げ>と渾然一体 (こんぜんいつたい) となって強い<信仰>となるのです。～ つまるところ、<解>から入ってもよし、<信>から入ってもよし、しかし、**必ずその両方を兼ねそなえるようにならないと、本当に力のある信仰にはならないのだ**ということ、しっかり胸に刻んでおいて頂きたいものと思います。

《^{しゆい}忠惟のひととき ⑨》

「<信>と<解>とを両方兼ねそなえ、それが円通しなければ、ほんとうの信仰とはいえないわけです」と庭野開祖が示す P.535 / P.407 の図表 (上図) を、かみ締めてみましょう。

《^{しゆい}忠惟のふいかえり まとめ》

今日の『信解品』の学びを通して、何を学び取ったか？
 (または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

以 上